

イギリス第2の都市バーミンガムの 図書館について

経営学部 経営学科 教授 吉田 忠彦

1. イギリス第2の都市バーミンガム

本学の在外研究制度を利用させていただいて、2012年の8月末からちょうど1年間、イギリスのバーミンガム市に滞在した。

バーミンガムはロンドンに次ぐイギリスの第2の都市で、古くから工業地帯として栄えた所である。伝統あるイギリスゆえ、歴史的な名所などいろいろ見どころも多いが、ロンドンやらエジンバラといった観光ツアーの定番の所と比べるとかなり地味で、600ページを超える『地球の歩き方・イギリス』でも、バーミンガムはたった4ページしか割当てられていない。実際、数日かせいぜい2週間ほどの観光目的でイギリスを訪れる人で、バーミンガムに立ち寄る人はまずいない。

移民が多く雑多で、ワーキング・クラスが多いこともあって住民もあまり屈託がなく、そして活気がある。何となく大阪に似た感じがする所である。大学の先生たちはいろいろな所から来ているし、ネイティブでない私たちには判りやすい標準語で話してくれるが、地元の人たちはそうはいかない。ロンドン下町がコクニー訛りなら、バーミンガムにはブラミー訛がある。日本なら関西弁か河内弁といったところだろうか。地元の人に屈託なくバーっとしゃべられると、本当に判らない。しかし、これを気にする現地人も多く、「自分のアクセントは訛っているので判りにくいかもしれない」などと申し訳なさそうに言われることがよくあった。もっとも、こちらはアクセントどころではない次元で聞き手を窮地に追い詰めてしまうような英語なので、すぐにこちらが恐縮せねばならなかった。

渡航前は、「何とかありますよ」と気休め

を言ってくれる人が多かったが、付け焼刃の英語で何とかなるわけがなく、脂汗を流さねばならないことが多々あった。実際、こちらの英語を聞く相手の目を泳がせたことが何度あったことだろう。真面目な人の場合、こちらの言ったフレーズをブツブツと小声で反唱を試みた後、しばらく沈黙し、意味が理解できなかったと告白し、謝罪してくれたりする。また、それを謎解きとして楽しんでくれる人もあった。

そんなありさまなので、ここで紹介する事からの内、私が聞いたという話の部分については、少々怪しいと割り引いて読んでいただいた方が無難かもしれない。

2. バーミンガム大学とその周辺

在外研究の受入れ先は、地方自治体研究の牙城と言われるバーミンガム大学のInstitute of Local Government Studies (INLOGOV) である。また、バーミンガム大学にはイングランドの民間非営利団体の全国協議会であるNational Council for Voluntary Organisations (NCVO) のアルマナックの調査なども担当するThird Sector Research Centre (TSRC) の本部もあるため、こちらのセミナーなどにも顔を出したり、近辺のコミュニティ再開発の現場をうろついたりしていた。

バーミンガム大学はバーミンガムのシティセンターから各停の列車で2駅南に行った所にあり、そこからさらに南に20分ほど歩いたあたりのフラットを借りた。工業地帯だったバーミンガムの中ではその周辺はかなりの美観地区で、ゴルフ場かと思うような広い公園ではリスが戯れ、あちこちから教会の鐘の音

がしてくる。すぐ近くのボーンヴィルという地区は、チョコレートの大手のキャドベリー社の本拠地で、同社が従業員の福利や地域のために安価で美しい住宅を建設し、今日もキャドベリー一族が設立したボーンヴィル・ヴィレッジ・トラストという住宅協会（民間非営利団体）がそれらの住宅とその街並みを守っている。住宅や都市計画の分野では、田園都市のはしりとなったレッチワースと並んで有名な所である。またキャドベリー一族が熱心なクエーカーであったこともあり、その本拠地にもなっている。

そのボーンヴィル・ヴィレッジ・トラストには、数年前にも調査で訪れたことがあり、その際にはこの地域や学校の雰囲気にとってもとした憧憬の念を覚えていたのだが、フラットがボーンヴィルに隣接した所であることに気づいたのは、住み始めて数日経ってからのことだった。家族5人での在外研究の準備には、ビザの取得をはじめ、さまざまな事にわずらわされ、とりあえずフラットを押さえ、子供たちの学校の手続きに必要な居住証明を取ることに必死で、それがどういう場所にあるのかも十分に把握していなかったのである。

3. 公共サービスの状況

かなり乱暴に私見を述べさせていただけば、イギリスと日本の違いは、日本は中山間地域が多く、さらに地震が起こることだと思う。どちらの国にも美しい四季の移り変わりがあり、気候も似ているのだが、イギリスには日本のような急な山がなく、地震も起こらない。そのため、レンガや石積みの建造物は古くて美しく、丈夫で、しかも経済的である。

そこそこの都市ならどこにでも荘厳な教会、城、屋敷、公共施設などの建物があり、こぢんまりとした地域でも歴史を感じさせる立派な建造物が多い。そして、人びとが住む住宅も古くても丈夫で、統一感がある。

どうやら建築物に対する考え方に違いがあるようで、ヨーロッパの人たちが日本に来ると、それぞれ勝手ばらばらな日本の建物や街

並みを見てショックを受けるらしい。

イギリスでは、郊外の田園都市などでなくとも、市街地でも街並みは統一され、公園などにもかなりのスペースが確保されている。そうした風景を見ると、やはり大阪とはちょっと違うなと思う。低所得者層向けの住宅でさえ、高層の集合住宅ではあんまりだとして、街並みに合わせた低層のテラス・ハウスやメゾネットに建てかえられたりしている。住宅政策の研究者に、日本では高層の集合住宅を「マンション」といって人気があるのだと言ったら、下手な英語で頑張ってジョークを言ったと勘違いされ、笑っていただいた。

ところが、こうした街並みや立派な建築物などの過去からの遺産には素晴らしいものがある一方、イギリスも日本に負けず劣らない財政難の国であるため、公共サービスはかなり深刻な状況になっている。

在外生活の出だしでまず苦戦したのが子供たちの学校だった。とりわけ、末っ子のセカンダリー・スクール（中高一貫校）は、申請して丸2カ月も待たされた。ごく普通の現地の学校で、しかも義務教育なのである。9月の学年始めの時期ということもあったが、それにしても遅すぎると問い質すと、市の人員削減のせいであまり手が足りないとのことだった。

福祉国家政策時代のなごりで医療費は無料というが、そのNHS病院で診てもらうには、まず近所でGPというホームドクターに登録し、そこで診察してもらってから病院への紹介状を書いてもらわねばならない。そこから2カ月ほど待たされる。急を要しない治療と見なされると、半年くらい待たされることもあるという。都会にはプライベートの病院や診療所などもあるが、もちろん非常に高額である。

街の歩道、駅、バスや列車の車内などはゴミだらけである。公衆マナーやモラル意識の低い国からの移民や留学生が多いことや、使い捨て容器や包装を標準とするアメリカから流入したフランチャイズのファストフード店のせいもあるが、何よりそれらの清掃のため

の予算が十分でないのである。

4. 地域の図書館

こうした行政の財政状況の悪化と、公共施設の管理に対する経営学の影響で、イギリスでも公設民営の施設が増えている。と言うよりも、こうした流れはイギリスがパイオニアで、先進諸国はそれに倣ってきたと言った方が正しいだろう。

イギリスでは労働党と保守党の二大政党によって政権交代が繰り返されているが（現在は保守党と自民党の連立政権）、とりわけ1979年の政権交代で誕生したサッチャー保守党政権から、それまでのケインジアンを経済政策や福祉国家指向は反転し、「小さな政府」、ニュー・リベラリズム指向の流れとなった。そして公共部門にも競争原理を導入し、効率性を追求する思想と手法は「ニュー・パブリック・マネジメント」と後に称されるようになり、程度と導入時期の多少のばらつきこそあれ、財政問題に悩む先進諸国における行政改革施策の標準となっていった。日本における公の施設の指定管理者制度もその典型で、イギリスに遅れること約四半世紀で導入された。



バーミンガム市の新築されたばかりの中央図書館。著名な建築家の手によるものらしい。夜は七色に光る。

今、日本の公立図書館の世界では、指定管理者制度の下、ビデオ・レンタル業のビジネスを手掛ける企業に管理運営を委ねたり、フランチャイズのコーヒー・ショップをその中

に出店させた先行事例をめぐって賛否両論が巻き起こっている。また、これに追随しようとする自治体も多いという。その議論は、これまでもさまざまな部分で事業委託、派遣労働者の利用を導入してきた大学にも波及することだろう。

しかし、バーミンガムをはじめとするイギリスの地域の図書館の状況は、そうした話題に比べるともっとシビアなものである。バーミンガム市の中央図書館は、きれいになったブリティッシュ・ライブラリーに負けじと、昨年（2013年）の秋に立派な新館をオープンさせたが、その他の各地区の図書館はすべて地域のNPOや住民団体に管理運営を委託してしまった。それもあまり予算がないので、週の内4日間くらいしか開いてなかったりする。



バーミンガム大学近辺の地区の図書館。1900年頃に建てられたもので、地域住民の団体が運営している。

さらに自治体予算が苦しい所になると、Community Asset Transfer という手法が使われ、公立図書館がNPOや住民団体などの民間に所有が移転されたりしている。公共施設の民間移転はこれまでもあったが、現在の連立政権になってから、それが国の正式なプログラムとなり、図書館の他にも公民館、プール、競技場などが各地で次々に民間に移転されている。民間の方が柔軟な管理運営ができるということもあるが、実際はそれらの施設の管理運営や建てかえの財源がないので、取り壊しにするか、それとも民間への移転によって施設を残す道を選ぶかという選択を迫られた末にというケースが多い。

しかし、このスキームを実現するためにはボランティアがいるだけではだめで、資産移転の手続きなどもこなせる、しっかりとした団体が必要となる。移民が多く、住民をまとめるのも難しいというような地域の場合には、予算がないからといって無理に地域の住民や団体に施設を引き取らせるというのは、少々無理があるかもしれない。

5. 大学図書館

所属した研究所の入る建物のすぐ隣が大学図書館だった。さすがにイギリス第2の都市の知の拠点だけに、立派な建物の図書館である。正面から見ても立派だが、中に入ると見た目以上に奥行が広い。入口にIDカードを通すゲートがあるだけで、あとはほとんど自由に使える。PC端末もかなりの数が置かれている。文具の売店コーナーもある。

しかし私自身は、研究所で専用の机やPCが用意されていたし、OPACや電子ジャーナルなどは自宅でも利用できたために、それほど図書館に足を運ぶことはなかった。もともと、現場に行って観察したり、聴き取り調査をするという研究を中心に行っているということもある。



24時間利用できて、学生でも手続きなしに書庫に自由に入れる。書庫内にも閲覧机があり、そこで勉強する者もいる。

しかし、研究室がない学生や大学院生にとっては、図書館は貴重な勉強の場である。適度の緊張感を求めて図書館で勉強する人も多いだろう。また、自分の専門から外れた分

野の調べものをする必要がある時などは、図書館は非常に頼りになる。IDカードさえあれば、書庫も含めて24時間自由に入出りできるという大学図書館は、非常に頼りになる存在である。

そもそも大学図書館の存在意義や効用は、それを直接に利用する際の便益だけで測れるものではないだろう。蔵書による情報のストック機能やレファレンス機能といった図書館のこれまでのコア機能については、すでにその主役の座をネットに奪われてしまっている。だからといって、「もう図書館は不要だ」とか「これからの図書館は高性能・分散型だ」というような意見は、図書館のごく一面しか理解していないものだろう。

少し前のことになるが、「大物を育てるには天井を高くするとよい」という住宅メーカーのテレビCMがあったが、建物というものの一面をうまく表した名コピーだと思う。その外観や空間の持つ威厳、雰囲気といったものが、それを目にし、触れる者に与える影響は、けっして小さなものではない。威風堂々たる大学図書館の建物を前にする時、これから本格的な学問に触れようとする若者は、きっと敬虔な気持ちになることだろう。万卷の書籍の圧倒的な迫力を前に、学問を志す者は己の襟を正すことだろう。

バーミンガム大学に限らず、世界中の伝統ある大学のキャンパスには、そうした立派な図書館が鎮座している。その堂々たる様があってこそ、そこが大学だと認知されるのだとさえ思う。

さて、翻って、私が大学と大学院の約十年の大半の時間を過ごし（何と、その頃は商学研究科には院生研究室がなかった）、その後も四半世紀にわたってお世話になっている（先日、永年勤続賞の時計をもらった！）本学の図書館の姿を振り返ってみると、初めてこの大学を訪れた人は、大学図書館を見つけるのに苦労するのではないかと思ってしまうのである。少なくとも、外観だけをたよりに探そうとしたならば、おそらく見つけれないだ

ろう。

地震が頻発する日本という国にあって、耐震構造の基準が高いとか、建物の寿命が短いというハンディもあったのかもしれない。あるいは、時代の求める新しい学部の設置が急がれたのかもしれない。しかし、規模、内容ともに日本有数の大学とって憚れることがないようになった今日、そろそろ大物を育てる風格を築き始めねばならないのではないだろうか。「人格の陶冶」の場に相応しい環境とはどんなものなのかを考えねばならないのではないだろうか。